

Title	カタロニア語の過去迂言形について
Author(s)	長谷川, 信弥
Citation	Estudios Hispánicos. 1996, 20, p. 85-91
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/97930">https://hdl.handle.net/11094/97930</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## [研究ノート]

# カタロニア語の過去迂言形について

長谷川 信 弥

0. カタロニア語の動詞迂言形式には、「直説法完了過去回説形」または「迂言的直説法単純過去」<sup>(1)</sup>などと呼ばれる、今日の他のロマンス諸語には見られない形式がある。<sup>(2)</sup>これは、例えば、スペイン語（カスティリア語）の直説法完了過去（点過去）に相当するものである。

(1) Ell va dir el mateix ahir. (彼は昨日同じことを言った。)

(1') Ell digué el mateix ahir.

この例文のように、過去を表す副詞と共起可能であり、これは(1')のように単純形との交換が可能である。また、助動詞 *haver* と過去分詞との組合せからなる現在完了形も直説法、接続法ともに存在することから、フランス語の状況とも異なり、このような迂言形を持たないスペイン語とも異なる。また、カタロニア語もスペイン語同様、不完了過去（線過去）を有するが、これは迂言形を持たない。この迂言形形成の初期にはプロヴァンス語、フランス語にもこの形式がみられたが、後に消滅してしまう。

この形式は、元来は「～へ行く」をあらわす動詞 *anar* の直説法現在形のもとに前置詞を介さずに不定詞を置くことにより得られる：

vaig    vam  
vas    vau    +    不定詞 (infinitiu)  
va    van

ところが、本動詞としての *anar* の直説法現在、1人称単数から順に *vaig, vas, va, anem, aneu, van* となるので、1人称と2人称の複数形では、迂言形は類推形と考えられる *vam* と *vau* が使われる。また、後述するように他の人称でもいくつかの異形が用いられている。またこの形式は、直説法直前過去や接続法過去の形態も持つ。

このように、この形式は基本的には動詞 *anar* の直説法現在と不定詞の組合せによって形成されるが、形態面で他の迂言形式とは異なった振舞いをするところから注目されるべき形式であると同時に、口語体での頻用がその特徴として挙げられる。また、多くの議論を呼んでいるその成立に関する諸問題も検討の必要があると考えられる。それらの点を挙げると次のようになる。

- a) その成立に関する諸説の検討
- b) 現代語における形態統語論上の諸問題
- c) 上記 b) の問題の実証的検討

ここではまず、この形式についての様々な点からの考察の準備段階として、その成立に関する議論を整理してみたい。

## 1. その成立に関する諸説

この形式の成立に関する説明の中で最も一般的なものは、いわゆる歴史的現在としての用法の拡大にその起源を求めるものである。つまり、フランス南部、ガスコーニュ、カタロニアで、元来起動相を表すこの形式が、中世の物語（語り）において歴史的現在として用いられたものが過去の価値を獲得したと考えるもので、13世紀頃から単純形と競合しながら用いられたとされ、15世紀に確立したと考えられている。そして、Jaume I 世の業績録の次の例がその初出例としてしばしば紹介されている：

(2) *E van ferir en la devantera los nostres als sarains.*

問題は、この形式がなぜ過去の価値を得ることとなったかにある。そこで、この点について López García (1979) のまとめる説明を検討する。

まず、上にも述べた、現在の起動相がもととなっているというものであるが、これは起動相が過去の価値へ拡大していくことが説明できなければ説得力がないし、数多くある起動相の形式のなかでこの迂言形だけが過去の価値を獲得したことを説明しなければならないが、これまで満足な説明は与えられていないという。また、同様の形式が未来の価値を帯びることが一般的であるということから、これが未来の方向とは反対に過去の方向に対して拡大していったとするものであるが、未来と過去の概念が共存することはできないとしている。さらに、現在形の文体上のバリエーションとして、つまりは歴史的現在形として過去の出来事を表したものが恒常的に過去時制として使われるに至ったとする考えがある。しかし、もっとも受け入れられている考え方であるこの「歴史的現在」の拡大については、あくまでも現在の体系によって許された発話価値に過ぎずとして退けられている。結論として、*vaig* を「具現化の指標 (*índice de actualización*)」とする考えを支持し、ラテン語の *ire* が持っていた /+ impulso/ という特性のみをこれが保持することによって、具現化が言語表現上の活性への手続き、つまり過去の出来事を発話時点により近い時点に位置させる手続きとして、過去を表すに至ったとする考えを展開している。また、具現化の指標とすることで、語りではない、説明された世界 (*universo comentado*)<sup>(3)</sup> におけるこの形式の使用も説明できるとしている。

以上のいくつかの考えから引き出せる筆者の考えは、最大の支持を受けている考え方に対する疑問、つまり、もしこの迂言形が「歴史的現在」の用法の拡大だと考えるならば、現在形自体が過去の出来事を表し得るために、*vaig* という形式そのものが必要ではなくなるのではないか、という点にある。「歴史的現在」ならば、現在形でありさえすればそれが表され、このような迂言形は必ずしも必要ではなくなるということである。だから、López García のような、*vaig* を何らかの指標とみる考えが、現時点では支持できるのではないだろうか。

López García は、古フランス語やプロヴァンス語においても、この形式がみられたものが、カタロニア語と別の経過をたどり、消滅していった理由を対比させながら検討しているが、この点については今後の課題としたい。

さらに、この形式の成立に関しては、さきにあげた(2)や14世紀初頭の

Ramon Muntaner の例などが現在形であるとの説もあり、これも今後の検討が必要であると思われる。しかし、当然のことであるが、これらはすべて文語体資料をもとに議論されていることであり、もしこの用法が口語体で始まったと考えることが可能であれば、その成立時期の特定には修正が必要になってくるであろう。というのも、現在においても文語体では単純形の使用もかなりみられ、口語体での迂言形の優位とは別の様相を呈しているからである。これは、初めは文語で散発的に用いられていたものが、その形態的簡潔さのために口語に広く定着することができたと考えられるのか、口語で先に定着していたものが、徐々に文語でもみられるようになったと考えられるのか、という問題をも提起しているが、さらなる検討が必要であろう。

## 2. 現代語の形態統語論上の問題点など

まず、現代語におけるこの用法の使用範囲はバレンシア地方を除くカタロニア語全地域とされており、そのバレンシア地方においては単純形の使用への固執があるとされている。しかし、一般にバレンシア方言<sup>(4)</sup>の文法書でもこの迂言形は扱われており、また同地の出版物にもその用例が容易に見いだすことができる。いずれにせよ定着度には若干であれ地域差のあることが予測される。

また、単純形との競合については、現在の口語体では迂言形の優位が認められ、単純形との交換は文体的な問題と考えられている。従来、文語体では文章に威厳をもたせるためには単純形が好まれるとされてきたが、現在ではあらゆるジャンルの文章において、どちらも区別なく用いられているとされる。

次に、異形について Badia i Margarit (1994) は、文学言語をモデルとした規範的な記述以外に言語レベルを3段階に分けて<sup>(5)</sup>言及していて、1人称単数 *vàreig*(N3), 2人称単数 *vares*(N2), 1人称複数 *vàrem*(N2), *vem*(N3), 2人称複数 *vàreu*(N2), *veu*(N3), 3人称複数 *varen*(N2) などの異形をあげている。<sup>(6)</sup>これらの *-r-* を含む形式は、*cantaren* などのような単純形にあらわれる *-r-* からの類推であるとしている。これらは、どれも文語体ではみられることがあまりないものなので、口語体資料からの実証が必要であろう。

直説法前過去は、不定詞の複合形を用い、*vaig haver* + 過去分詞 となり、接続法過去で用いられる形態は *vagi, vagis, vagi, vàgim, vàgiu, vagin* となり、*anar* の接続法過去形とは 1 人称複数 (*anem*)、2 人称複数 (*aneu*) においてやはり異なる。直説法前過去では、*haguí = vaig haver* からの類推であると考えられる形式である。接続法過去では、(3)は(3')と言い換えることが可能である。ただし、直説法では単純形と迂言形の交換は常に可能であるが、(4)のような過去の不完了をあらわす接続法過去の時は、迂言形で言い換えることができない。<sup>(7)</sup>

(3) *Ell no diu que tu li ho vagis contar.*

(3') *Ell no diu que tu li ho contessis.*

(彼は、君がそのことを(彼自身に)語ってくれた、とは言っていない。)

(4) *Ell volia que li ho digués.*

(彼は、そのことを(彼自身に)言ってもらいたかった。)

最後に、いわゆる近接未来を表す迂言形 *anar a* + 不定詞 との競合を指摘して、今後の調査課題を検討する。カスティリア語の数多い影響のひとつであるといわれている近接未来は本来カタロニア語にはなく、避けることが望ましいとされている。

(5) \**Vaig a ensenyar-vos el secret del joc.*

(6) *Us ensenyaré el secret del joc.*

(6') *Us ensenyo el secret del joc.*

(君達にそのゲームのこつを教えてあげよう。)

(5)よりも未来形の(6)、または現在形の(6')のほうがよいとされている。しかし、実際にはカスティリア語の影響は避け難く、迂言形もよく用いられている。ここでは、近接未来や未来形の用法についての議論には立ち入らないが、形態として非常に類似したものが競合するとなると、単に表現上の問題ではなく、伝達の効率の上でも支障をきたす可能性が考えられる。つまり、カタロニア語では、強勢のない *a* および *e* は、あいまいな母音

[ə] に弱化して発音されるため、(5)の *ensenyar* の語頭の e- も続けて [ə] と発音されて、結果的に *vaig ensenyar* と *vaig a ensenyar* の発音上の差異がごくわずかなものになってしまうのである。これは、不定詞の語頭が強勢のない a- または e- の場合にのみ起こることになり、必ずしも重要な問題とはならないかもしれないが、区別を明確にするためには時を表す副詞などの他の要素の助けを借りるなどの方法をも考慮しながら言語運用上の問題点として実証的な調査を今後の課題とする。

このように、上にあげたいいくつかの問題点を今後の課題としてさらに詳しい調査と検討を加えたい。

#### 注

- (1) 前者の名称は、田澤(1991)、後者は伊藤(1993)による。
- (2) 形式上は、これと同じ形式をもつロマンス語はあるが、例えばフランス語では近接未来を表す。
- (3) Weinrich (日本語版「時制論」紀伊國屋書店(1982年)) の用語として取り上げている。
- (4) バレンシアでは、バレンシア「方言」はカタロニア語から独立したバレンシア「語」とされていて、文法書も多数出版されているが、ここでは帰属の問題は議論せず、カタロニア語の一方言として扱う。
- (5) 「高いレベル」(*nivell elevat*)、「日常言語」(*llenguatge corrent, llengua habitual*)、「口語体」(*parlar col.loquial*) を順に N1, N2, N3 として分けている。N2 にあたる形態は、Fabra(1956) でもとりあげられている。
- (6) さらに方言的な形式として、1人称単数に *vai, vaic* という最も一般的な口語体では避けられるべき形式をあげている。
- (7) Fabra(1956), § 58. Joan Coromines の注記。

#### 参考文献

- Badia i Margarit, Antoni(1962): *Gramàtica catalana*. 2vols. Gredos.  
 —————(1995): *Gramàtica de la llengua catalana*. Edicions Proa.  
 Bourciez, Édouard(1967): *Éléments de linguistique romane*. 5<sup>e</sup> ed. Ed. Klincksieck.  
 Fabra, Pompeu(1956): *Gramàtica catalana*. Teide.  
 Iorgu, Iordan y Manoliu, María(1980): *Manual de lingüística románica*. 2vols. Ed. Gredos.

- López García, Ángel(1979) : *El pretérito perifrástico catalán y la teoría de las perífrasis románicas*, en Homenaje a Samuel Gili Gaya, pp.129-137. Bibliograf.
- Marti i Castell, Joan(1981) : *El català medieval. La llengua de Ramon Llull*. Ed. Indesinenter.
- Miracle, Josep(1983<sup>o</sup>) : *Gràmica catalana*. CASAL I VALL.
- Nadal, Josep M. i Prats, Modest(1982) : *Història de la llengua catalana*. Vol. I. Edicions 62.
- 伊藤太吾(1993) : スペイン語からカタルーニア語へ. 大学書林.
- 大高順雄(1984) : 古カタロニア語ノート 一迂言法過去一. 言語文化研究. Vol.10. pp.213-217.
- (1987) : カタロニア語の文法. 大学書林.
- 田澤 耕(1991) : カタルーニャ語文法入門. 大学書林.



